

# 計量経済 II：定期試験

村澤 康友

2023 年 1 月 24 日

**注意：**3 問とも解答すること。結果より思考過程を重視するので、途中計算等も必ず書くこと（部分点は大きいに与えるが、結果のみの解答は 0 点とする）。

- (20 点) 以下で定義される時系列分析の専門用語をそれぞれ書きなさい。
  - 2 標本の 2 つの回帰モデルの係数ベクトルの差の F 検定
  - 階差がホワイト・ノイズとなる確率過程
  - 独立な I(1) 間の回帰係数の OLS 推定量が 0 に確率収束しない現象
  - $\text{var}(Y|X)$  が  $X$  に依存すること
- (50 点)  $\{y_t\} \sim I(1)$  は ARCH(1) のホワイト・ノイズをもつ。すなわち任意の  $t$  について

$$\begin{aligned}\Delta y_t &= \delta + w_t \\ w_t &= \sigma_t z_t \\ \sigma_t^2 &= c + \alpha w_{t-1}^2 \\ \{z_t\} &\sim \text{IID}(0, 1)\end{aligned}$$

ただし  $c > 0$ ,  $\alpha \in [0, 1)$ 。以下を求めなさい。

- $E_t(w_{t+1})$
- $E_t(y_{t+1})$
- $\text{var}_t(y_{t+1})$
- $E(\Delta y_t)$
- $\text{var}(\Delta y_t)$

3. (30 点) 1960～1982 年のアメリカのマクロの所得と消費の年次データの対数系列について Johansen の共和分検定を行い、以下の結果を得た。

Johansen 検定:

式の数 = 2

ラグ次数 = 4

推定期間: 1954 - 1985 (T = 32)

ケース 4: 制約付きのトレンド, 制約のない定数項

Log-likelihood = 300.587 (定数項を含む: 209.775)

ランク	固有値	トレース検定	p 値	最大固有値検定	p 値
0	0.32004	15.979	[0.5022]	12.343	[0.3963]
1	0.10740	3.6358	[0.7891]	3.6358	[0.7909]

標本のサイズに合わせて修正した検定 (df = 22)

ランク トレース検定 p 値

0	15.979	[0.5664]
1	3.6358	[0.7982]

固有値 0.32004 0.10740

beta (cointegrating vectors)

l_Y	215.86	-89.665
l_C	-296.57	75.240
trend	2.6521	0.52767

alpha (adjustment vectors)

l_Y	0.0042314	0.0038349
l_C	0.0075257	0.0021369

renormalized beta

l_Y	1.0000	-1.1917
l_C	-1.3739	1.0000
trend	0.012286	0.0070132

renormalized alpha

l_Y	0.91339	0.28854
l_C	1.6245	0.16078

long-run matrix (alpha \* beta')

	l_Y	l_C	trend
l_Y	0.56954	-0.96638	0.013246
l_C	1.4329	-2.0711	0.021087

共和分階数を  $r$  とする。

- $H_0 : r = 0$  vs  $H_1 : r = 1$  の尤度比検定統計量の値を示し、検定結果を述べなさい。
- $H_0 : r = 0$  vs  $H_1 : r = 2$  の尤度比検定統計量の値を示し、検定結果を述べなさい。
- 1960～1982 年のアメリカのマクロの所得と消費の対数系列について、Johansen の共和分検定から分かったことを説明しなさい。

解答例

1. 時系列分析の基本用語

- (a) チョウ検定
- (b) ランダム・ウォーク
- (c) 見せかけの回帰
- (d) 条件つき不均一分散

2. ARCH 過程の和分過程

- (a) 時点  $t$  で  $\sigma_{t+1}^2$  は既知であり,  $\{z_t\}$  は IID(0,1) なので, 任意の  $t$  について

$$\begin{aligned} E_t(w_{t+1}) &= E_t(\sigma_{t+1}z_{t+1}) \\ &= \sigma_{t+1} E_t(z_{t+1}) \\ &= \sigma_{t+1} E(z_{t+1}) \\ &= 0 \end{aligned}$$

- (b) 式変形すると, 任意の  $t$  について

$$y_t = y_{t-1} + \delta + w_t$$

前問より任意の  $t$  について

$$\begin{aligned} E_t(y_{t+1}) &= E_t(y_t + \delta + w_{t+1}) \\ &= y_t + \delta + E_t(w_{t+1}) \\ &= y_t + \delta \end{aligned}$$

- (c) 前々問より任意の  $t$  について

$$\begin{aligned} \text{var}_t(y_{t+1}) &= \text{var}_t(y_t + \delta + w_{t+1}) \\ &= \text{var}_t(w_{t+1}) \\ &= E_t(w_{t+1}^2) \\ &= E_t(\sigma_{t+1}^2 z_{t+1}^2) \\ &= \sigma_{t+1}^2 E_t(z_{t+1}^2) \\ &= \sigma_{t+1}^2 E(z_{t+1}^2) \\ &= \sigma_{t+1}^2 \text{var}(z_{t+1}) \\ &= \sigma_{t+1}^2 \\ &= c + \alpha w_t^2 \end{aligned}$$

- (d) 前々々問と繰り返し期待値の法則より, 任意の  $t$  について

$$\begin{aligned} E(\Delta y_t) &= E(\delta + w_t) \\ &= \delta + E(w_t) \\ &= \delta + E(E_{t-1}(w_t)) \\ &= \delta \end{aligned}$$

(e) 前問と繰り返し期待値の法則より, 任意の  $t$  について

$$\begin{aligned}\text{var}(\Delta y_t) &= \text{var}(\delta + w_t) \\ &= \text{var}(w_t) \\ &= E(w_t^2) \\ &= E(\sigma_t^2 z_t^2) \\ &= E(E_{t-1}(\sigma_t^2 z_t^2)) \\ &= E(\sigma_t^2 E_{t-1}(z_t^2)) \\ &= E(\sigma_t^2 E(z_t^2)) \\ &= E(\sigma_t^2 \text{var}(z_t)) \\ &= E(\sigma_t^2) \\ &= E(c + \alpha w_{t-1}^2) \\ &= c + \alpha E(w_{t-1}^2) \\ &= c + \alpha \text{var}(w_{t-1}) \\ &= c + \alpha \text{var}(w_t) \\ &= c + \alpha \text{var}(\Delta y_t) \\ &= \frac{c}{1 - \alpha}\end{aligned}$$

### 3. Johansen の共和分検定

- (a) 最大固有値検定統計量 = 12.343. p 値 = 0.3963 > 0.05 より  $H_0 : r = 0$  は棄却されない.  
(b) トレース検定統計量 = 15.979. p 値 = 0.5022 > 0.05 より  $H_0 : r = 0$  は棄却されない.  
(c)  $H_0 : r = 0$  が棄却されないので共和分階数は 0. すなわち 1960~1982 年のアメリカのマクロの所得と消費の年次の対数系列について, 共和分関係は認められない.